

## 絵画から読みとく「館山まるごと博物館」～ 青木繁と倉田白羊

池田 恵美子 (NPO 法人安房文化遺産フォーラム 共同代表)

19世紀末、南房総市白浜町根本から渡米した小谷源之助は、器械潜水アワビ漁の先駆者といわれる。日本人会長も務め、風光明媚なポイントロボスのゲストハウスをアートギャラリーとし、竹久夢二や小圃千浦など多くの文人墨客を迎え、支援していた。

弟の仲治郎は9年滞米の後に帰国し、南房総市千倉町千田に暮らし、水産振興や教育・文化活動にも力を入れていた。

海産物問屋「金澤屋」を営む父小谷清三郎は、乾鮑製造に秀でており、第1回水産博覧会で褒章を受けるなど、農商務省や水産伝習所とのつながりが深かった。婿入りした清三郎の実家は根本の森家といい、日本で最初の器械潜水によるアワビ漁の実験をしている。俳諧ネットワークなどの文化活動も盛んであった。

根本の隣接地は館山市布良<sup>めら</sup>といい、両集落には小谷姓が多い。画家の青木繁が滞りし重要文化財《海の幸》を描いたのは、布良の小谷喜録宅である。両家には共通することが多い。

布良はマグロ延縄船発祥の漁村であり、先代の小谷治助は第2回水産博覧会の鮪引縄で褒章されている。喜録は鮮魚仲買商を営む船主であり、大日本水産会会員、帝国水難会布良救難所の看守長、村会議員など要職を歴任していた。

1890(明治23)年夏、水産伝習所白浜実習の際、布良で世話を受けたお礼として、所長の関澤明清から小谷喜録へ感謝状と『日本重要水産動植物之図』が贈られている。これは農商務省が制作した日本初のカラー魚貝図で、パリ万博に出品したものである。古文書調査から、金澤屋も実習の世話をしたことが判明しているので、同じ感謝状と図版は小谷清三郎も贈られていたはずである。年齢は7歳ちがうが、同時代に隣り村で水産に関わる者同士、清三郎と喜録は知り合いであった可能性が高い。

近年、小谷仲治郎の旧宅を解体することになり、当NPOは襖絵4枚の寄贈を受けた。仲治

郎の義弟、倉田白羊<sup>はくよう</sup>の作品である。白羊は少年時より親戚にあたる浅井忠の絵画指導を受け、東京美術学校を卒業した。1910(明治43)年に房州写生旅行中に小谷ひでと出会い結婚した。

美校の同期生だった岡本一平は、館山在住の倉田を訪問したエピソードを、1919(大正8)年の朝日新聞に寄稿している。「海の底へ」という題で、『一平全集』にも収録されている。

画家をしながら、石油発動機船に乗って突きん棒のカジキマグロ漁をしている倉田に連れられて、仲治郎に会い、器械潜水を体験させてもらったという報告である。「車で七浦千田へ着いた。此処の漁業組合長小谷氏は倉田君の義兄に当る人。長年加州モントレイで採鮑事業をやったとかで、房州訛りの間に英語が混り、座敷の床には森田恒友君の画が描かれてある」という。さらに「三人がかりで潜水服を着させた。厚い毛糸のシャツと股引を二重に着け…、赤いゴムで出来た人型の服というより寧ろ氷枕に近いものの中へ無理に捻じ込む。痛い。胸の前後を螺旋鋏で止める。…胸の前後に六貫目のおもりを掛ける。三貫目の鉛の靴を穿かせる。しめて二十貫。…」と、挿絵入りで面白おかしく書いている。

仲治郎の女婿の大島四郎が著した『安房の潮左為～碧水小谷仲治郎の一族』によると、ひでは仲治郎がもっとも愛した妹であり、画家倉田白羊にとっても義兄の仲治郎はよき理解者であり後援者でもあったという。それは父の小谷清三郎も同様であつたらしく、逝去時には画家の小杉未醒<sup>みせい</sup>からの弔文が送られている。

倉田は、房州で児童自由画教育を奨励していた。児童の指導にあたりとともに、教師らを集め研究会も行っている。館山で自由画展を開催した折には、友人の山本鼎<sup>かなえ</sup>も審査のため来房し、意見を交している。千葉県師範学校付属小学校でも倉田の指導や研究会が行われ、県下に自由画教育が広まっていった。折しも同校で

は、後に自由ヶ丘学園を創設する手塚岸衛が「自由教育」を実践していた時期に重なる。

1921(大正10)年には安房美術会が創立されており、倉田が直接関わったかどうかは不明だが、安房地域の芸術振興に貢献したことはまちがいない。

山本鼎は、日本創作版画協会を設立して版画を普及し、キリンビール商標の創作者としても知られる。フランス留学の帰途に経由したモスクワで見た児童画展に感動し、それまで模写中心であった日本の美術教育に、児童の感性で表現する自由画教育を導入しており、クレパスの考案者でもある。また、冬のロシアで農閑期に農民が木彫りなどを制作するのを見て、日本でも農民美術運動を広めていった人物。

1922(大正11)年、山本は信州上田に日本農民美術研究所を開き、倉田は副所長として招聘され、移住する。房州の教師らは引き続き倉田の指導を仰ぐため、児童画教育研究団「草山会」を組織する。移住後も倉田は時々房州を訪れ、美術教育に尽力したという。佐倉市立美術館には、倉田に関する資料として「房州児童画」と記された作品群が所蔵されており、富崎尋常小学校児童の作品も確認できた。

館山市図書館に、倉田の絵画《水門》が所蔵されている。『三太物語』で知られる文学者で画家の青木茂(館山在住)の遺族が、懇意にしていた倉田作品を寄贈したものである。

《水門》の写生地は、今も残る松林と大房岬の稜線から、館山市の湊川(平久里川)河口であると比定できた。背景の館山湾に浮かぶ帆船は、その帆型より日本初の洋式船「富崎丸」と考えられる。布良(富崎村)の船大工・豊崎政吉が造船した石油発動機付帆船は、従来船より大きいため富崎漁港には入港できず、館山湾に係留されていたという。先述の岡本一平の証言により、倉田は富崎丸に乗っていたとわかる。

なお、豊崎政吉を主人公にした小説『鬼が瀬物語』4部作(岡崎ひでたか著)は、中学生の課題図書に選定されている。

布良は先進的な漁村であり、1882(明治15)年より器械潜水によるアワビ漁を村営で行い、収益で道路や漁港の整備、漁船改良、水産増殖、海難救済、学校や病院の建設などを進めた。金澤屋も布良に支店を出し、活動拠点にしていた。

青木繁は、もう1作の重要文化財《わだつみのいろこの宮》の制作について、1907(明治40)年に国民新聞に連載を寄稿している。それによると、布良でアマメガネを借りて海に潜った体験から構想し、2年後に長崎で潜水器を借りて潜った体験がイメージソースになったという。

しかし、作家の岩野泡鳴ほうめいが『新小説』に発表した「故青木繁氏の一面」には、潜水体験について言い合いになったとき、青木は「自分は布良で潜水器を着て海底に沈んで見たと云った」と記されている。この違いは何故生まれたのか。

青木が滞在した年は日露戦争下であり、布良は東京湾要塞の望楼をもつ要衝であった。青木を世話した小谷喜録が、ロシアの砲声を記録し大本営に報告する立場にあったため、忬度から伏せていた体験を、舌戦となりつい口走ってしまったのかもしれないと想像される。

青木繁は1911(明治44)年、28歳で早逝した。画壇の仲間らは、美術文芸雑誌『方寸』の廃刊にあたり、最終号に青木の追悼特集を掲載した。『方寸』は石井柏亭、森田恒友、山本鼎によって創刊され、後に倉田白羊、織田一磨、小杉未醒が加わり、5年間発行された。

青木の追悼号は、倉田白羊・ひで夫妻が編集を担当している。青木が布良で《海の幸》を描いたとき、ひでは14歳で、明治女学校に進学する前年のことであった。隣り村で同姓の小谷家に青木が滞在したことは、ひでも聞いていたのではないだろうか。

文化度の高い漁村のリーダーたちが、太平洋をはさんで画家を支援していたことは、偶然ではなく、不思議な糸が海の底でつながっているようである。